

## 【報告】

# 母親が子ども虐待に至った心理的プロセス

長山 ひかる<sup>1)</sup> 巽あさみ<sup>2)</sup>

- 1) 聖隷クリストファー大学看護学部
- 2) 人間環境大学看護学部

## The Psychological Process That Causes Child Abuse with Mothers

Hikaru Nagayama<sup>1)</sup>, Asami Tatsumi<sup>2)</sup>

- 1) School of Nursing, Seirei Christopher University
- 2) University of Human Environments

### 《抄録》

【目的】 母親が子ども虐待に至った心理的プロセスを明らかにすること。

【方法】 虐待してしまった母親等を対象とした親子グループ A 教室に参加している母親 9 名に半構造化面接を行い、M-GTA を用いて分析した。

【結果】 母親は、子育てをする中で【現実との乖離】に直面し、それが積み重なると【子どもへの認知】が、子どもへの否定的感情に向かい、【母親の内面】は、《表裏の感情》や《自己否定》を抱き〈叩いてしまう母親〉となる。その反面、母親は、〈よい母親への願望〉が常にあり、【母親の相克】の状態になる。母親は、この状態から抜け出そうと【母親のものがき】を繰り返し専門家に支援を求め、【孤立からの解放】に向かう。母親の《自己否定》は緩まるが、日々、子どもと向き合う中で、子どもへの否定的感情が生じてくると再び〈叩いてしまう母親〉となる。

【結論】 日常的に子育てを一緒に見守ってくれる人や相談できる支援者がいることで、母親の育児が認められ安定した子育てにつながり、子ども虐待の予防につながる。

### 《キーワード》

子ども虐待、母親、相克、MCG (Mother and Child Group)

## I. はじめに

近年、核家族化や少子化により家庭や地域社会での子育て機能の低下が言われている。子ども虐待対応件数は、児童虐待の防止に関する法律（以下、児童虐待防止法）制定直前の1999年度の11,631件から2021年度には207,660件へ増加している（厚生労働省, 2022）。

主な虐待者は、47.5%が実母、次いで実父の41.5%からなり、子ども虐待の虐待者の約半数が母親である（厚生労働省, 2022）。

虐待者の半数を占める母親について、住民基本台帳からランダムサンプリングした母親や、保育園や幼稚園に子どもを通わせている母親を対象とした質問紙調査によって虐待の要因に関する研究がされている。その中で、「子どもに虐待をしているのではないか」と認識している母親は、「自由な時間がない」「身体的疲労」を理由とした子育てのイライラ、育てていくうえでの問題、子どもについての悩みがあり子育てが楽しくない、夫との会話が少なく、夫の対応が悪く精神的な支えとなっていないという母親の背景要因が報告されている（巽, 2004）。虐待の要因を得点化した質問紙調査では、虐待の得点が高い母親は「虐待の対象となった子どもに対して気が合わないと思ったことがある」と回答しており、母親が、「子どもと気が合わない」と感じる時の理由として乳幼児を持つ母親は、「子どもへの反抗・反発」「思いどおりに動かない」「自分に似ている」「素直でない性格」などの心理的特徴を挙げていた（萱間, 2001）。虐待をしている母親へのグループインタビューでは、「子どもと気が合わないこと」への心理的状況は明らかにされている。しかし、これまでの研究では、子どもを虐待した当事者への質的研究や子どもを虐待した母親が虐待に至った過程については明らかにされていない。

そこで本研究では、幼児を虐待した母親が虐待に至った心理的プロセスを質的研究において明らかにすることを目的とした。

母親が虐待に至った心理的プロセスを明らかにすることは、子ども虐待に関わる保健師等が、母親を心理的に受容し、より適切に母親への支援に役立てることができる。

また、すでに子ども虐待傾向にある母親については、虐待が重症化しないように支援することに結びつくと考えられる。

## II. 用語の定義

子ども虐待：子どもへの暴力や暴言などの身体的虐待や心理的虐待とする。

A 教室：月1回、A市の保健センターで実施されている。虐待をした母親及びそれと同等の支援が必要な母親を対象とした親子グループ。内容は、母親同士のグループワークであり、育児不安、ストレス等の軽減や育児態度への支援などを行っている。保健師、臨床心理士はグループワークに関わり、保育士は親子遊びなどに関わっている。

母親：A教室に参加している母親。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究は、半構造化面接法を用いた質的記述的研究である。

### 2. 研究対象者と選定手続き

A教室に参加している母親の中で、以下の1)～5)の要件を満たす人を研究対象者とした。

- 1) 仕事をせず子育てに専念している母親
- 2) 精神疾患を持たず、自分のことを明確に説明できる母親
- 3) 子どもに対して身体的・心理的虐待があり問題と認識している母親

- 4) 保健センターの保健師が支援している母親
- 5) 研究への参加に同意の得られた母親

選定の手続きでは、協力市の責任者に本研究の概要を説明し、協力市の市長宛てに依頼文書を提出し許可を得た。また、対象となる保健センターの管理責任者、A教室の担当保健師には、研究の概要、研究内容、倫理的配慮について文書及び口頭で説明し、協力の承諾を得た。その後、筆頭著者が、A教室に参加し、対象候補者の母親に研究の概要、研究内容、倫理的配慮について文書及び口頭で説明を行い、研究への協力依頼を実施した。研究への参加に同意が得られた場合には、研究対象者として同意書に署名を得て面接を実施した。本研究では、書面同意を得た母親のみを研究対象者とした。

### 3. データ収集の方法

データ収集期間は、2009年6月から2009年10月であった。

データ収集方法は、インタビューガイドに基づいた半構造化面接法を用いた。面接は、対象者のプライバシーが保持できるように協力市の保健センターの面接室にて実施した。また、面接内容は、研究対象者に同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。質問内容は、1) 子どもに手が出てしまう、きつい言葉をかけるのはどんな時か、2) 叩いてしまう時の母親の感情の有無、3) その時の子どもへの感情、4) 夫や周囲の支援者に支援を求めたか、5) 支援を求めた時の支援者の反応、6) どんな支援があれば子どもに手をあげたくなる気持ちが生じるに至らなかったと思うかについてであり、研究対象者にはできるだけ自由に語ってもらうように配慮した。

### 4. データの分析方法

データの分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified

Grounded Theory Approach, 以下 M-GTA) を用いた。

本研究では、得られたデータに密着した分析となるよう、分析焦点者と分析テーマを設定した。分析焦点者は「保健センターで実施しているA教室に参加している母親」に設定し、分析テーマは「A教室に参加している母親が子どもを叩いてしまった経験的プロセス」とした。分析テーマと分析焦点者に照らして、データの着目箇所に着目の意味を解釈した。また、着目箇所は具体例とし、解釈内容を簡潔な文章で表現して定義とし、さらに凝縮した言葉で概念名を命名した。ひとつの概念には、ひとつのワークシートを作成し、すべてに概念名、定義、具体例、理論的メモを記載した。一方、具体例が豊富に出てこなければ、その概念は有効でないと判断した。生成された概念の完成度は、類似例の確認だけでなく、対極例についての比較の観点からデータをみていくことにより、解釈が恣意的に偏る危険を防いだ。その結果は、ワークシートの理論的メモ欄に記入した。次に、生成した概念と他の概念との関係は個々の概念ごとに検討し、複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成した。分析結果は、カテゴリー相互の関係からまとめ、その概要を簡潔に文章化 (ストーリーライン) し、結果図を作成した。

分析の初期段階において、生成した概念、定義、データは相互を照らし合わせ解釈に偏りがないか、他の解釈可能性などについても一つひとつ、M-GTAの研究を行っている教員と共に確認し合い、分析過程についても、終始、その教員からのスーパーバイズを受けた。

### 5. 倫理的配慮

本研究では、研究対象者に対し、研究目的、研究方法、秘密の保持、研究の参加は任意であり、得られた情報は研究以外で使用しないこと、得られたデータは個人が特定される形

表 1. 対象者の概要 (インタビュー調査時)

対象者	年齢	家族構成	子どもの年齢
A	30代前半	夫,子ども3人	長女4歳,二女1歳後半,三女1歳後半(二女と双子)
B	30代前半	夫,子ども1人	長男2歳後半
C	30代前半	夫,子ども2人	長女4歳,長男2歳後半
D	30代後半	夫,子ども2人	長男5歳,二男1歳後半
E	30代後半	夫,子ども2人,義父,義母	長女8歳,長男4歳
F	30代前半	夫,子ども2人	長女4歳,長男1歳後半
G	30代前半	夫,子ども2人(二世帯住宅)	長女6歳,長男2歳前半
H	30代後半	夫,子ども1人	長男4歳
I	30代前半	夫,子ども2人	長男4歳,長女2歳前半

では公表しないこと、データは研究終了後適切な方法で速やかに破棄すること、答えたくない質問には答えなくてもよいこと等を文書及び口頭で説明し同意書に署名を得た。本研究の研究計画は、浜松医科大学医の倫理委員会・看護学研究に関する倫理審査部会で審査を受け承認された。(承認番号：第20-129)

#### IV. 結果

##### 1. 研究対象者の概要

研究参加の同意が得られた対象者は9名であった。概要を表1に表す。

対象者への面接は、58分～96分で1人当たりの平均面接所要時間は79.3分であった。

##### 2. ストーリーライン

分析の結果、母親が子ども虐待に至った心理的プロセスについて、36の概念が生成さ

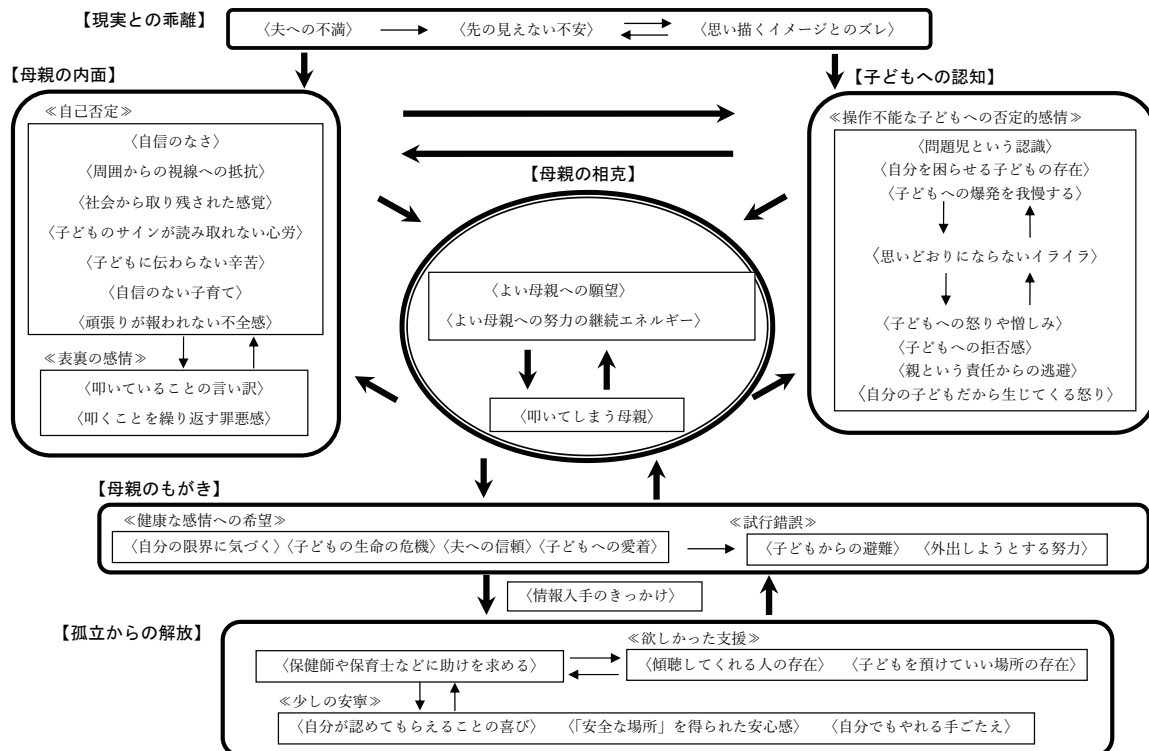


図 1. 母親が子ども虐待に至りなんとかしようとする心理過程

れ、最終的に、6つのカテゴリーと7つのサブカテゴリーと36の概念に分類された。文中【】内はカテゴリー、《》内はサブカテゴリー、〈〉内は概念を表わす。「」内は概念の具体例を表し、対象者の番号を（）内のアルファベットで示す。具体例は、インタビューで対象者が語った言葉をなるべく用いたが、分かりにくい箇所は（）内に言葉を補い、直接関係が無いと思われる箇所は省略した。図1の表題は、母親が子ども虐待に至った心理的プロセスについて具体的に表現することが必要と考え、母親が子ども虐待に至りなんとかしようとする心理過程とした。

母親は、〈夫への不満〉や日常の子育ての中で〈先の見えない不安〉や〈思い描いていたイメージとのズレ〉から【現実との乖離】を感じる。【現実との乖離】が積み重なることで《操作不能な子どもへの否定的感情》が生じ、子どもが自分の言うことを聞いてくれないために〈問題児という認識〉や〈自分を困らせる子どもの存在〉という【子どもへの認知】が否定的な方向に変化していく。母親は、一旦は、〈子どもへの爆発を我慢する〉状態で踏みとどまるが、日常生活での〈思いどおりにならないイライラ〉から、徐々に余裕がなくなり、子どもをコントロールしたいという欲求も高まり、〈子どもへの怒りや憎しみ〉〈子どもへの拒否感〉〈親という責任からの逃避〉〈自分の子どもだから生じてくる怒り〉の感情を抱くようになる。そして、母親は、子どもへの〈怒りや憎しみ〉が増大し、なんとか子どもをコントロールしようとして、〈叩いてしまう母親〉となる。

【現実との乖離】が大きいと【母親の内面】は、〈自信のなさ〉が増し、〈周囲の視線への抵抗〉や〈社会から取り残された感覚〉を背景に、〈子どものサインが読み取れない心労〉や〈子どもに伝わらない辛苦〉を強く感じるようになる。よい母親になりたいのに、うまく子育てできない自分に直面した母親は、

徐々に〈自信のない子育て〉や〈頑張りが報われない不安全感〉がつり《自己否定》を強く抱くようになり、ついには、子どもを〈叩いてしまう母親〉となる。

母親は子どもを叩くことについて〈叩いていることの言い訳〉を抱きながら、一回叩くと〈叩くことを繰り返す罪悪感〉を感じる《表裏の感情》を持ち、【母親の内面】と【子どもへの認知】の間を行ったり来たりしている。

このように、母親は、〈よい母親への願望〉を抱きながら、努力して頑張っているが、〈よい母親への努力の継続エネルギー〉の低下から〈叩いてしまう母親〉の自分にも直面し、うまくできないといら立って叩いてしまう、叩いてしまうとよい母親ではない、でもよい母親になりたいと【母親の相克】の状態にある。

母親は、叩いてしまうことを繰り返しながらも、〈子どもへの愛着〉〈子どもの生命の危機〉〈自分の限界に気づく〉〈夫への信頼〉という《健康な感情への希望》から、孤立無援の中で〈子どもからの避難〉や〈外出しようとする努力〉など《試行錯誤》し、【母親のものがき】の中で這いあがれない状態を繰り返す。

【母親のものがき】から保健事業への参加など、〈情報入手のきっかけ〉もあり、母親は、なんとかしようとして〈保健師や保育士などに助けを求め〉〈傾聴してくれる人の存在〉〈子どもを預けていい場所の存在〉など《欲しかった支援》に気づく。支援を得た母親は〈安全な場所を得られた安心感〉〈自分が認めてもらえることの喜び〉〈自分でもやれる手ごたえ〉から《少しの安寧》を感じ【孤立からの解放】に向かっていた。【孤立からの解放】によって、母親は、《自己否定》は緩まるが、子どもと向き合う日々の中で、《操作不能な子どもへの否定的感情》が生じると再び、【母親の相克】の状態となり〈叩いてしまう母親〉となってしまうプロセスであった。

### 3. 各カテゴリーの説明

6つのカテゴリーについて代表的な概念とその定義、具体例を用いて説明する。

#### 1) 【現実との乖離】

母親が子育てを開始してからあるいは子育てをしている中で生じてくる現実とイメージとのズレを表す。

〈夫への不満〉は、身近な支援者である夫のサポートが母親の期待するものとは違うことを不満に思うことである。

「旦那が、結局、何にも手伝ってくれなくて。子育てや家のこととかをね。仕事だけして帰ってきたらもう、自分の遊び。ゲームやったりとか、友達と電話したりとか、全然相手にしてくれなくて、それが、つもりつもっちゃったのかな。(G)」などである。

〈先の見えない不安〉は、母親は、子どもに夜起きて授乳することや子どもの泣き声にどうやって対応していいかわからないこと、特に、それがいつまで続くのか分からず不安になることである。

「正直ってこんなに眠れないとは思ってなかった。産んでこんな生活が激変するなんて思ってなかった…ほんとにこんなに眠れなくて大丈夫かなって。(B)」などである。

〈思い描くイメージとのズレ〉は自分自身が想定していたこととは違うことを子どもがすることで生じる感情のことである。「最初は、育児本とか見て、何カ月の中にはこういうことが始まる、何カ月になると子どもの心はこんな感じになるっていうのは知識として身につけておかないといけないと思って読んでいたけど、現実にはそぐわない。現実との違いが多すぎちゃってどうしていいのかわからなくて、余計自分がパニックして、余計子どもがわからなくなっちゃう感じ。(G)」などである。

#### 2) 【母親の内面】

母親の内面にある感情を表す。

#### (1) 《自己否定》

〈社会から取り残された感覚〉は、子どもと二人だけで長時間いることで、一般社会と距離を感じ孤独感を感じることである。「アパート暮らしだったので近所との付き合いもそうないし、外に出る機会もないし、もうほんと、宇宙人としゃべっているようなもんじゃないですか。ちゃんとした大人との会話が全くない日もあるし、主人以外は…このままでいたら私、社会人と会話ができるのだろうか心配になった。(C)」などである。

〈頑張りが報われない不全感〉は、自分がこんなに一生懸命子育てをしていることを認められないと感じることや、誰も理解してくれないと思うことである。

「エネルギーがなくて誰とも話をしたくなかった。誰かに相談しようとも思ってなかった。あんまり信用してなかった。他の人にどうせ言っても分かんないだろうみたいな。(G)」などである。

#### (2) 《表裏の感情》

子どもを叩いてしまうときに生じる母親の感情である。

〈叩いていることの言い訳〉は、子どもは叩いて教えないといけないこともあるという認識である。

「言い訳だけど子どもに、“それぐらいしても何も言わない。お母さんはこれだけやっても怒らない”ってなめられると大変だと思う。後々ね。叱らない親が多いっていうから、人や親は怖いと思わさないといけないと思う。(A)」などである。

〈叩くことを繰り返す罪悪感〉は、子どもを叩いてしまうことを申し訳なく思うことである。

「やっぱり結構手が出ちゃうところが、一時的ですけどカーってなったときに強くバンンって叩いちゃって、ちょっとは徐々に収まってくると“何やってたんだろう”って思ったり、夜寝顔を見ながら“なんで今日叩

「いちゃったのだろう」とか思って、「明日はもう叩かないぞ」って思うんだけど、その時の感情で一時的に1~2回強く叩く。カーっとなっているから強く叩いていた。その繰り返し。「明日はやめよう、明日はやめよう」って思いながらずーっと思ったり来たりっていう感じでしたね。(H)」などである。

### 3) 【子どもへの認知】

母親が子どもの存在や行動をどう捉えているかを表すカテゴリーである。

#### (1) 《操作不能な子どもへの否定的感情》

子どもをコントロールしたいという母親の思いはあるが、思うようにコントロールできない子どもへの感情を表す。

〈自分を困らせる子どもの存在〉は、子どもの発達や行動を肯定的に捉えず、自分を困らせているように捉えることを表す。

「幼稚園では“活発だけど、言えば分かる子だし大人しく座ってられる子です。って言われる。“なんで私の前ではできないんだ”って。“幼稚園のようにやってくれよ”っていつも思う。“なんで私だけを困らせるんだ”って思っちゃう。(D)」「上の子が帰ってくると憂鬱なんです。テレビのリモコンずっと持っていたりとか…いちいち呼ばれるのが嫌なんです。自分のやっていることを中断されるから。(I)」などである。

〈子どもへの怒りと憎しみ〉は、母親がどれだけ必死になって頑張ってもうまくいかず、子どもの行動すべてに怒りを抱くことである。「“もう捨ててしまおうか”って思ったり“もういない”って思ったりとか“外に出しちゃおうか”って思ったり、“階段から突き落とす”って思った。手をあげるのだけはずっと我慢していた。(F)」などである。

〈子どもへの爆発を我慢する〉は、母親が、子どもを叩いてはいけないと自分で我慢して堪えていることである。

「子どもと離れたかった。そばにいたら、ど

んなことを子どもにしちゃうか制御できなくなる時があった。同じことを毎回毎回毎回やって、毎回同じことで怒って、もうそれが自分の中で“またやった。またこれやった”みたいなのが何十回もあるととんでもなく叩いちゃいそう。頭とか叩いちゃいけないんだけど、バシバシ叩いてしまいそうだったり、殴りそうって思うことがあってそういう時は、離れなきゃいかんって思っていた。(G)」などである。

〈子どもへの拒否感〉は、子どもがやるすべての行動や反応を受け入れることができなくなり、子どもを避けることである。

「一階のキッチンに泣いているのを放って、二階で寝たりとかした。自分が鬱じゃないかって思っていた時期は、何をやっていてもかわいくないですよ。(F)」などである。

### 4) 【母親の相克】

母親が、自分自身で〈よい母親への願望〉と〈叩いてしまう母親〉の中で堂々巡りしている状態である。

〈よい母親への願望〉は、子育てがうまくやれる、子どもをしっかり躾ができる母親でありたい、他者からそう評価されたいという願望のことである。

「明日から言葉気を付けなきゃとか。悪い言葉は使うのをやめよう、自分の見られる(自分が他者から見られる)雰囲気も言葉とか悪いからそう見えちゃうし、やることも雑だったりする。そういうことも気を付けようとか反省する。(E)」などである。

〈叩いてしまう母親〉は、ついに自分の怒りが抑えきれなくなり、子どもを大声で怒鳴ったり、手を出したりしてしまうことである。

「一回叩いたら“もういいや”って思えてきて、一回腹が立つとお尻とかをパチンって結構強い力で叩いたりとか、叩いてもおもしろがったりとかして“あははは”って笑うよう

になって、そうになったら“笑うならいいじゃん”って思えてまた叩くことが増えた…(F)」などである。

#### 5) 【母親のもがき】

母親が虐待している状態から自分でなんとかしようとする状態を表す。

##### (1) 《健康な感情への希望》

母親の子どもと夫への感情や理性的な感情である。

〈自分の限界に気づく〉は、このままではダメだと限界に気がつくことである。「かなり自分が辛くなったときに、保健センターに相談した。子育てしにくい子ですけど。自分で、SOSを出した。(B)」などである。

〈夫への信頼〉は、期待する支援まではいかないが、夫が支援してくれていることを認めていることである。

「(夫を) 当てにはしてないけど、(家に) いるのといないのでは私の中では違う。精神的な面で特に。帰ってくるのが分かっていたら安心するし、帰ってくる時間をカウントダウンすることもある。(D)」などである。

##### (2) 《試行錯誤》

子どもを叩くことをなんとかやめようと母親がいろいろ試してみるが、全くうまくいかない状態を表す。

〈子どもから避難〉は、子どもから離れて叩くことをやめようとすることである。「叩かないようにどうしたらいいんだろうって、10数えたらいいとか、違う部屋にいけば叩かないとかあったけど、とっさのことなので、10数えたこともありましたが10では怒りが収まらないですよね。(H)」などである。

#### 6) 【孤立からの解放】

母親が、子どもを虐待してしまう孤立状態から支援につながる状態を表す。

〈保健師や保育士などに助けを求める〉は、母親が追い詰められて保健センターや子育て支援センターなどに相談することである。

「健診の間診票に“子どもを虐待していると思うか”みたいな質問があって、迷わず“ある”って書きました。私は、毎日、子どもを叩いていることの辛さや子育ての大変さをなんとかしたくて“ある”にした。聞いてもらいたかったんですね。(H)」などである。

##### (1) 《欲しかった支援》

追い詰められて虐待してしまう前に何があればよかったかと母親が必要とした支援のことである。

〈傾聴してくれる人の存在〉は、自分が追い詰められて子どもに手を出してしまい苦しかった時に自分の辛さを聞いてくれる人がいることである。

「自分の辛い思いを聞いてくれて“そうだね。辛いね”って言ってくれる人がいてくれたらと思う。(F)」などである。

##### (2) 《少しの安寧》

母親が子育てに少し前向きに取り組めるようになってくることを表す。

〈自分が認めてもらえることの喜び〉は、保健師や保育士に子育てについて相談できることや自分を認めてもらえることで救われることである。

「保健師に“お母さん頑張っているね”って言われたことで初めて安心できた。3歳何か月まで言われたことが無くなって、だから、そういう一言がうれしくて(自分の頑張りが)報われたような感じだった。初めて、自分の子育てを認めてもらえた気がした。(H)」などである。

〈「安全な場所を」得られた安心感〉は、子育て中の母親と話して、周囲と初めて共感ができ安心することである。

「自分だけではないって思った。話を聞いていると、分かる分かるって共感ができた。私みたいな母親が他にもいたっていう安心感と話



してみても共感できる部分があったという。(C)」などである。

〈自分でもやれる手ごたえ〉は、子育てに少し前向きに取り組めるようになることである。

「(子どもの) 痛癢が始まるとギャーって泣いて…支援センターの先生や保健センターで相談したり、心理の先生に話を聞いてもらったりとかして解決策を教えてもらって、それを試してうまくいったりとかすると“よし。いけるかも。私まだできるかも”って思える。一つうまくいくと自分にも自信がつく。(F)」などである。

## V. 考察

### 1. 現実との乖離

母親は、子どもの夜泣きで眠れないなどの身体的疲労の中で精神的負担感を感じていた。本研究では、その原因が子どもであることから、母親に子どもへの否定的感情が生じ、虐待につながっていくことが明らかになった。藤田(2001)は、育児に対するイメージと現実とのズレがある方が、子どもに対して憎らしいと思う母親が多い傾向にあると述べている。また、原田(2006)は、育児は予測できないことが多く不確実な状況に遭遇する機会が多いことが、母親にとって大きな精神的ストレスの原因となり、子ども虐待につながるひとつの原因であるとしており、本研究と同じような傾向がみられた。

夫の支援については、母親の生活状況や生育歴、夫婦関係によって夫に期待するサポートが異なっていた。夫には具体的な助言や話を聞いて欲しいなどの支援をしてもらいたいという意識があることが明らかになった。高田(2008)は、母親は、子どもを持つことによって、自分の生活の変化の程度やそれに伴う肉体的・精神的負担度が想像を超えていたことによる乖離を感知すること、母親の心理

状態が夫の子育てに対する評価に影響を与えていることを述べている。母親は、子育てがうまくできないことにより、自己否定や自尊心感情、自己効力感が低くなり、夫から支援をしてもらっているという認識が少ないのではないかと考えられる。西澤(1994)は、虐待群の母親は父親が子どもを拒否している、もしくは子どもに関心を持っていないとみる傾向があり、子育て全般に関して父親を頼りにしないと述べており、本研究と同様のことを報告している。

その一方で、本研究では、母親は、子どもと二人で過ごす中で夫の帰宅を待ちわびるなど、夫が家にいてくれることで、精神的に安定できているという認識があったことが明らかとなった。これは、自分以外の第三者としての夫がその場にいるだけでも母親の精神的安定につながり、子ども虐待の重症化の歯止めになっていると考えられる。

### 2. 母親の内面と母親の相克

母親は、他人と比較して常に「よい母親であらねばならない」という認知の歪みから子育てに自信がなくなっていき、努力してもうまくいかず、次第に不全感が生じていくプロセスであった。今回の研究では、このような経過の中で母親は、子どもをちゃんと育てたいと子どもと正面から向き合いながら、必死になって子育てに取り組もうとしているがうまくいかない負のスパイラルの状況に陥り、自己効力感が低下していくことが明らかになった。

虐待する母親の特性として、西澤(1994)は、自己評価が低く自信が持てない母親は、「子どもが泣き止まないのは自分が悪いためだ」という認知を持ち、その結果、子どもの泣き声そのものが自分を責める声に聞こえてしまうのだと考えられると述べている。春原(2005)によれば、虐待を認めている層の母親では、理想的な「ちゃんとした母親」にな

らなければならないという意識が過度に強く、理想的な母親と現実の自分のギャップのはざままでいら立ちを覚えて虐待が生起し母親はこうあるべきという像があり、それができない怒りが子どもに向かい、自分にも向かうのであると述べている。

母親には、子育てを一人で抱え込まないようにすることや完璧な親ではなくてもいいことを妊娠中や出産初期から教育していく必要がある、保健師など専門職者が効果的に関わっていくことが求められる。

### 3. 子どもへの認知と母親の相克

本研究では、子育てを始めてからの不安や思い描くイメージとのズレによって現実との乖離が生じた母親は、子育てがうまくいかない状況から、自分の子どもが問題児であると捉えたり、子どもの行動を自分への嫌がらせと否定的に捉えたりして爆発をこらえている状態があったことが明らかとなった。西澤 (1994) は、虐待群の母親は自分の子どもの発達を平均以下で見る傾向があり、その傾向は子どもへの認知と関係していると述べている。中谷 (2006) は、育児ストレスがネガティブな認知の促進要因として影響し、育児生活による疲労感や負担感、母子相互交渉において母親が子どもの行動をネガティブに捉える傾向を高めると述べている。また、坂井 (2002) は、自分の嫌な受け入れがたい傾向は他人に投影されることになり、都合の悪い部分である慢性的な怒りや不全感を他人の責任にするという思考法を用いることが多く、子どもを対象に投影が起こると、子どもの行動を歪んで解釈するようになり、子どもをスケープゴートにすると述べている。これらでは本研究と同様のことが述べられており、母親が子どもを否定的に捉えることが子ども虐待に関係していると考えられる。

### 4. 母親のもがきと孤立からの解放

母親にとって、A 教室に参加することは、グループワークによってお互いに共感でき、自分自身の不適切な対応を振り返る機会となっていた。また、母親は、A 教室という場が自分自身を自己開示することができる場であり、自分が頑張らなくていいと感じられる場、よその子どもを見て自分の子どもと比較や競争をしなくてもいい場で、安心な場所と認識していた。これらは、専門家から頑張りを他者から認められることが「こんな自分でもいいんだ」と母親の自尊感情を高めることになっていた。また、母親が、グループワークで自分の気持ちや考えを言葉で表現することは、自分を客観的に捉えることができることに繋がっていた。さらに、母親は A 教室を通して、自分の育児について「こんなものである」「これでいい」と受け止め、育児への手ごたえを感じ前向きに子どもと向き合おうとする変化がみられた。清水 (2006) は、MCG (Mother and Child Group, 以下 MCG と略す) に参加した母親は、同じ立場の母親から話を聞き、話すことの“話す・聴く”プロセスを共有する中で自己の振り返りをする効果、周囲が受け止め共感してくれること、母親同士の関係が強化されることを報告しており、本研究と同様のグループワークの効果が述べられている。

また、本郷 (2008) は、MCG を利用した母親への保健師の支援は、個々の母親と信頼関係を築き、寄り添う個別ケアと母親の全体像を把握するための MCG と並行しながら支援していると述べている。徳永 (2009) は、個別関係を成立させるには、親の訴え (主訴) は否定しないで傾聴していくが、その奥にあるニーズを表現するように手助けすることが大切で、個別支援を定期的に継続して関わる大切と述べている。

保健師には、家庭訪問や面接を通して、母親と関係性を築き、必要に応じて気軽に相談

できる雰囲気や傾聴する支援が期待される。本研究では、グループ支援と個別支援を組み合わせることで支援していくことが、虐待の重症化の防止や母親の育児行動の改善に繋がっていくことが示唆された。

## VI. 研究の限界と今後の課題

今回の分析対象者は、自分自身が子どもへの虐待について問題意識を持った母親で、全員が状態を改善しようという意思を持っていた。また、保健事業への参加や保健師や保育士などの支援につながって改善がみられてきている対象者であった。しかし、一つの自治体の保健センターの事業に参加している9名に限定されていたことから、今後は対象者を増やした分析によって、子どもを虐待した母親の心理的プロセスの詳細を解明していく必要がある。

## VII. 結語

母親が子ども虐待に至った心理的プロセスを明らかにすることを目的として、半構造化面接法とM-GTAによる分析を行い以下のことが明らかになった。

1. 母親は、子育てをする中で【現実との乖離】に直面し、それが積み重なると【子どもへの認知】が、《操作不能な子どもへの否定的感情》に向かい、【母親の内面】は、《表裏の感情》を伴いながら《自己否定》が強くなり、ついに〈叩いてしまう母親〉となる。その反面、母親は、〈よい母親への願望〉が常にあり、【母親の相克】の状態になる。母親は、この状態から抜け出そうと孤立無援の中で【母親のものがき】を繰り返す。そして、専門家に支援を求め、【孤立からの解放】に向かい、母親の《自己否定》は緩まるが、日々、子どもと向き合う中で《操作不能な子どもへの否定的感情》が生じてくると再

び【母親の相克】の状態となり〈叩いてしまう母親〉となってしまうプロセスであった。

2. 子育てをする中で母親は、自己効力感が低くなりやすい傾向にあり、子どもとうまく関われないことで子育てにも自信が持てなくなる一方で、よい母親になりたい願望と努力を継続するができない自分への不全感が生じていた。

3. 母親は、コントロールできない子どもという【子どもへの認知】に対するイライラから怒りや憎しみに変化し子どもを虐待してしまう状態であった。

4. 子どもを叩いてしまった母親は、A教室に参加して初めて、安全な場所を得られた安心感、自分が認めてもらえるという感覚を得ることで前向きな子育てへと向かっていた。

## 謝辞

本研究にご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、浜松医科大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程の修士論文の一部を発表した。

## 利益相反

本論文に関し開示すべき利益相反事項はない。

## 文献

- 原田正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防—. 名古屋大学出版会, 愛知.
- 春原由紀 (2005). 母親支援のために—「子ども虐待」に悩む母親たちとの心理劇—. 現代のエスプリ, 495, 79-85.
- 本郷美由紀, 津村智恵子 (2008). 児童虐待のためのマザーグループを活用した保健

- 師による母親支援. 家族看護研究, 13 (3), 143-149.
- 藤田麻美, 飯田美代子他 (2001). 乳児を持つ母親の児に対する憎らしい感情に関する研究. 母性衛生, 42 (4), 539-544.
- 萱間真美 (2001). 児童虐待に介入する視野と技術「気が合わない子ども」というストーリー. 保健婦雑誌, 57 (13), 1-7.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い. 弘文堂, 東京.
- 木下康仁 (2007). ライブ M-GTA 実践的質的研究方法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの全て. 弘文堂, 東京.
- 厚生労働省 (2021). 令和3年度社会福祉行政報告例の概況.
- 中谷奈美子, 中谷素之 (2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究 17 (2), 148-158.
- 西澤哲 (1994). 子ども虐待 子どもと家族への治療的アプローチ. 誠信書房, 東京.
- 坂井聖二 (2002). 子ども虐待の背景と発生メカニズム. 小児内科, 34 (9), 1345-1354.
- 清水洋子 (2006). 地域における子ども虐待防止を目指したグループ・ミーティングの効果に関する研究. 平成14年度～17年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究結果報告書, 1-20, 東京.
- 高田直美, 巽あさみ (2008). 子育ての想像と現実の乖離がもたらす母親の感情. 地域看護学会誌, 10 (2), 47-53.
- 巽あさみ, 小野雄一郎 (2004). 「子どもを虐待しているのではないか」と思う母親の虐待の認識と背景要因の検討. 医学と生物学, 148 (2), 8-13.
- 徳永雅子 (2009). 親への支援;親支援グループと個別支援, 発達, 30 (117), 66-73.
- 唐軼斐, 矢嶋祐樹, 中嶋和夫 (2005). 母親の子どもに対するマルトリートメントの構造化の試み. The Journal of Health Sciences, 7 (4), 269-276.
- 唐軼斐, 矢嶋祐樹, 中嶋和夫 (2007). 母親の育児関連 Daily Hassles と児に対するマルトリートメントの関連. 厚生指標, 54 (4), 13-20.